〔松屋叢話〕春海の世におはせし頃、源氏物語に、いたちのまかげといふ事の見えたるがいぶかしきよし、常にいはれ侍りき、その家にて歌の會せられしをりに、橘千蔭、清水濱臣などにもかたりあはされしかど、とかうことはりいひたるものもなかりしに、このごろ余（小山田與清）がおもひよりたるふしあれば、こゝにいふべし、（略中）今の世にも鼬の立て前足を目の上にかざしつゝ、人をまもることあるを、いたちのまかげとはいへる也けり、遠方のぞむ時は、かならずしも眼上に手をさしかざすわざ、今もむかしもなほおなじかるべし、

〔源氏物語五十三手習〕あま君しはぶきおぼゝれておきにたり、火かげに頭つきは、いと白きに黑きものをかづきて、此君（手習）のふしたまへるをあやしがりていたちといふなるものがさるわざするひたひに手をあてゝ、あやしこれは誰ぞと、しうねげなるこゑにて、見おこせたり、

〔源平盛衰記十三〕鳥羽殿鼬沙汰事

五月（治承四年）十二日ノ午刻ニ、赤ク大ナル鼬ノ何クヨリ來リ參タリ共、御覽ゼザリケルニ、御前ニ參リ二三返走リ廻リ、大ニキヽメキテ法皇（後白河）ニ向ヒ參セテ、踊上々々目影ナンドシテ失ニケリ、大ニ淺間シク思召テ、禽獸鳥類ノ怪ヲナス事、先縱多シトイヘドモ、此獸ハ殊ニ樣有ベシト覺タリ、

〔倭名類聚抄十八毛群名〕貂　四聲字苑云、貂（音凋、和名天）似鼠黃色、皮堪作裘、

〔箋注倭名類聚抄七獸名〕天見著聞集、蓋貂字音轉、按說文、貂鼠屬、大而黃黑、出胡丁零國、李時珍曰、貂今遼東高麗、及女眞韃靼諸胡皆有之、其鼠大如獺而尾粗、其毛深寸許、紫黑色、蔚而不耀、用皮爲裘帽風領、毛帶黃色者爲黃貂、白色者爲銀貂、依李所說、說文字苑所云者黃貂、時珍云、紫黑色者、黑貂也、

〔東雅十八畜獸〕虎トラ（略中）　今俗ニ貂皮をトンビといふは、貂皮の音を轉せしにて、朝鮮の方言に依